

杉十小開放講座 2002年7月16日 午後7時～

「前田利家の生き方とその時代」

講師：関川 安男氏

講師プロフィール：歴史研究家、元東京都大田区立大森東中学校校長。退職後、大田区教育委員会、歴史講演活動等で活躍中。

中学校歴史教科書（中教出版）の編集に参加 「人間関係入門」（自費出版）

『前田利家の生き方とその時代』

今日のお話の目玉はこれです。（手元資料）右の方と中ほどに教授資料日本史要説と書いてありますが、これは中学校、高校の歴史の年表で有名な吉川弘文館の前身の会社が作った大学の歴史講座資料の中から取っている、かなり古いものです。

徳川幕府の初めに、大名が潰された（改易された）数がどの位あるのかを一覧表として纏めたものを引用しています。22年間で62の大名が潰された。1601年からの約半世紀の間に120もの大名が改易されたという一覧表です。数だけで考えてみたら半世紀の間にこれだけの大名が潰されたことは想像以上に大変だったのです。

今、リストラ、再構築とか、国際的にもどうだとか言われているのに実行出来ないのは、徳川幕府に比べると今の政府は比較にならないほど力が弱いからです。逆に言うと当時の徳川幕府はものすごく強かったのです。前田家がその間をくぐり抜けて如何にして生き残ったかということです。大名ともなれば、幕府や周りの諸大名の情報は逐次調べ上げていて、どういうことをしたら潰されるとか、虐められるというのは分かっていたのです。しかし分かっていたながら上手くいかなかった。

もちろん、働くことや一生懸命やるのが悪いことではありませんが、それだけではうまくいかない世の中、生活、社会においても生き残りを賭けるための生き方が必要かつ求められるような気がしています。

いくつかの例をお話ししてみましょ。資料のプリントの右側から二人目、慶長7年小早川秀秋（51万石）備前岡山とありますね。

この人知っているでしょう。会ったことはないにしても。（笑）

関ヶ原の合戦で東軍・西軍が膠着状態になっている時に、この人物が松尾山で東軍に寝返ったために関ヶ原の合戦の勝敗が変わったという有名な歴史上の人物です。

関ヶ原の合戦については、明治になってドイツの有名な戦術家メッケル少佐（後のドイツ陸軍参謀総長、日本陸軍の明治時代の基礎を築いた人物）が西軍と東軍の布陣を観て、どんな戦いの仕方をしていても必ず西軍が勝つと、東軍に勝ち目がないということを強硬に主張したという話が残っています。

関ヶ原の合戦の時に、松尾山で小早川秀秋が裏切ったという事実を知らないメッケルが結末に承知しない時に、実は松尾山の小早川秀秋が裏切ったことを

知り、それなら戦局は一変すると納得したそうで、それほど松尾山という所は重要な所だったので。

では、その重要な所に西軍が秀秋を何故布陣させたのか、秀秋の秀は秀吉の秀、秋は毛利家の水軍を一手にまとめた小早川家の秋で、秀秋は幼少から秀吉の下で将来の関白候補として育てられていた人物で、西軍（豊臣方）にしてみれば、かつての関白候補だから重要な松尾山の拠点を任せたわけです。

関ヶ原の合戦で西軍が負けて、捕らえられた石田三成の所に東軍の武士たちがぞろぞろと行った時、三成がかっと目を見開いて、「おまえのために西軍は負けたのだ。」と大きい声で言い、秀秋は一言もなくすごすごと逃げ去ったという裏話があります。

徳川方から見れば秀秋は大変な功労者であり、対毛利戦略もあり、備前の宇喜田秀家（西軍の副大将）のあとを秀秋に任せたわけです。しかし秀秋がアル中でノイローゼになってしまい、臣下が、「殿、ちょっと過ぎますよ。」と言ったら「臣下のくせに何を言うか」と、その臣下を切ったという噂があるのですが、結局、酒乱・ノイローゼになり、21、22歳で死んでしまうのです。幕府は、跡取りもいないし、行状から見れば後を継ぐことはまかりならぬとあっさり改易にしてしまった。悪く言えば利用するだけ利用して、「はい、さようなら」です。ですが、そういう例は、この一覧表の中ではたくさんあります。

主なところだけをピックアップしますが、福島正則、（元和5年49万8千石安芸廣島）、この人は石田三成憎しということで、関ヶ原の合戦の時は家康方というよりも東西両軍どちらから見ても大活躍をした人です。この安芸廣島に移される前、秀吉が封じたということで小田原の成敗、関ヶ原の合戦より10年前の1590年に尾張伊勢で城を任せたのが福島正則です。

家康が江戸・関東に領地を移した後、東海道の主要な所には、秀吉の信頼できる大名を配置したと言われていますが、その要になったのが福島正則です。家康は会津征伐で行なった軍議（作戦会議）の時に、自信があったと見えて「もし、この中で豊臣に恩顧のものがあって、豊臣に付きたいというものがあるならば、今から陣をまとめて大阪へ行け。」と言っているのです。その時に正則が「私は治部（石田三成）を倒さなければ豊臣の将来はないと思う。内府（家康）の下にはせ参じて治部を倒したいから、私の城は、もし内府の軍が通るならば無条件で通しましょう。」と言うことを一番最初に言い出したために、そこにいた他の大名たちも皆忠誠心を疑われまいと追従したのです。

秀吉が尾張を出て、最初に大名になった近江の長浜城。家康が不足していた様で、方々から目ぼしいのを見つけてスカウトしたのですが、その時に活躍したのが、ねねさん（後の北の政所）です。ねねさんが尾張の方から目ぼしいのをスカウトし、そのナンバーワンがねねさんの遠縁に当たる正則でした。

福島正則というのは出世頭で、それが家康に付き、しかも関ヶ原の戦いでは、その先鞭を付け、しかも実際の合戦の時には徳川の譜代の臣を差し置いて、先陣を任されているのです。本来ならば、徳川で先陣を任されるのは三河

以来の大名である井伊家ですが、井伊家を差し置いて福島正則が先陣を請け承り、名誉この上なく、しかも福島正則はそれだけの活躍をしています。

ところが、台風が広島地方を襲って広島城の石垣が崩れ、それを修復するのに届けなかったとか、凶面が違ふとか、不届き千番ということで広島城を召し上げられた。しかもこの時に福島正則はさすがに腹にすえかねて、幕府の使者を2時間（一刻）以上待たせて、幕府の使者は正則は反抗するのか、切腹するのかと色々考えたそうです。ようやく2時間経って出てきて、「委細承った。」と言いますが、その時正則はもし内府（家康）が生きていたら、俺はこういう処遇は受けなかつたらうと述懐をしたそうです。そして安芸広島を出て、4万5千石に減俸された信濃・川中島、49万8千石から一割以下に減らされて、ここで正則は死ぬのです。

武家諸法度の中では、大名が亡くなった時には検死が来て確認するまでは遺体はそのままにしておくことがあったのですが、家来がそれではあまりにも不憫に思い、検死が来る前に茶毘に付してしまい、不届き者めと、この4万石も取り上げられてしまうことになった。ダブルパンチとはこういうことです。

徳川家、利用するだけ利用して用が無くなればと言う印象があるのですが、今言ったのは外様大名の一つの例に過ぎません。一つの例と言うのは他にもたくさんありますから、外様以外でも不届きなことがあったり、用が無くなれば改易された例は一覧表の中に載っている人が何人もいます。

例えば「三河物語」を書いた大久保彦左衛門は有名ですが、佐渡金山の佐渡奉行として幕府の財政を預かる身にありながら、汚職をしたことで大名を召し上げられ旗本に落ちた。それが右側のページにある19年大久保忠隣6万5千石、大久保彦左衛門の先祖と言うのは三河以来の殿様でしたが、幕府の中でそういう主要な大名も容赦なしです。それから、その2段目の一番左側。この人もご存知でしょう。坂崎孝親。この石見津和野。所謂坂崎出羽の守と言って、大阪の陣の時に、もし家康の孫、秀頼の奥さんになった千姫を救った者には千姫を嫁とらせるぞと言ったので、この人物は一生懸命戦って千姫救ったのです。ところが千姫の方があまり気に入らなかつたのです。

去年、千姫の分骨の墓があったという、茨城水海道の弘経寺というお寺にみなさんと一緒に行きましたけれど、あの千姫を救った功労者と言えども、後で荒れたとか、千姫を大事にしないと、千姫が嫌がったという理由で出羽さんあっさり首にされてしまいました。

その点では他の例を挙げますと、左の方の上の左から3番目、加藤忠廣、51万9千石肥後熊本。加藤清正の息子です。清正は50歳で毒饅頭食わされて死んでしまった言うのは嘘で、実際は血圧が高くて脳溢血で亡くなったそうです。

豊臣家に非常に尽くしたと言うこと、家康によくついたということ、福島正則を説得したという説もありますが、息子の忠廣の代になったら肥後熊本も召し取られてしまう。徳川忠長、55万石、駿河府中、この人は家光の実弟で、むしろ家光よりも下馬評では次期将軍候補としては力量、統率力に優れ、有力視され、諸大名も次期将軍は竹千代君（家光）ではなく、忠長だと参勤交代な

どの色々な機会に忠長の方に接近していたのですが、家光が將軍になってみるとあまりにも力がありすぎ邪魔者になり、駿河府中召し上げて上州高崎城で自分で切腹します。

これを見て、家光にはもう一人忠長の他に弟がいましたが、会津藩祖の保科正之。家光の異母弟に当り、この保科家の子孫がやがて幕末に活躍する松平家となります。その保科正之は忠長が色々なことで、やり過ぎると潰されたことを見て、むしろ將軍家、幕藩体制に全面的に協力して生き残ったと言われています。そこにある面で言えば生き残りの賭け方ということがありますが、この忠長の物語は悲劇と言われています。

それから寛永15年肥前島原松倉勝家、松倉勝友、寺沢堅高、肥前唐津ではこの3人の大名が相次いで改易になっています。これは島原の乱の責任を取らされているのです。島原の乱で農民が一揆を起こして幕府は大騒ぎをした。有名な島原の乱です。

自分の領内を統率できない者は大名の資格はないということで全部没収されたのです。寺沢堅高の場合にはその後、弟がなっているのですが、これもダメだと言って潰されています。それが一番下の段にある正保4年12万石肥前唐津。こういうように自分の領内で上手くいかない場合にもやっぱり幕府は認めなかった。

それから最後にもう一人、家康の腹心と言われた大名も潰されている例、これでこの項目終わりになりますけど、それは家康の腹心ですよ。もちろん家康死んだ後ですよ。家康が生前「おまえたちよくやったから加増する。」ところが、家来たちは、皆それぞれ加増されて、「ありがたき幸せに存じます。」と言ったのですが、一人だけ「私は最後まで内府様にお仕えすることが大事で加増が目的ではございません。」と辞退した大名がいますね。本多定信です。ならば息子正純に加増すると言って息子に加増した。この息子も徳川家によく仕えた。

この仕えた代表的な例が有名な方広寺の鐘の国家安康です。これは元々はお坊さんが中国の古典から取った文章ですが、それに坊さん同志がライバルとして、家康に付いていたお坊さんが、これは家康を首にするものだということで、けしからんと言いつけちを付けたのです。そのライバルの坊さんが金地院崇伝です。崇伝は黒衣の大將とか影の大將とかいわれた元々武士から出た坊さんです。この崇伝がいちゃもんを付けた。このいちゃもんを付けたのを豊臣方にこれはけしからんとやったのが本多定信の息子です。しかも本多定信はいわゆる権謀術数というか裏技が上手いということでは息子も有名です。大阪冬の陣の時に大阪城の壕を埋めるという時、総壕というのは外壕のことというのは大阪側の主張、ところが江戸側では総壕だから全部の壕だからと埋めさせたのは本多正純、だからある面で言えばえらい功労者、それも家康が亡くなって用が無くなったらハイさようなら、それは右側のページの真ん中辺にある元和8年本多正純、本多正勝、15萬5千石下野宇都宮、これを召し上げられました。

要するに、この一覧表の中にあるのは、外様であれ、親藩であれ、譜代であ

れ、幕府の意にそぐわない大名は何らかの形で理屈を付けて皆潰しているという一覧表なのです。ある面言えば時代の変革の時代の難しさを示す一つの例です。

50年間でこれだけのことをやらされた。そのプリントの方に入りますとね。平和な時代であれば、いわゆる前例とか先例とか慣例というものをやって済んでいたわけです。それなりに今は今、昔は昔、世の色々な資料とか情報は皆取っていたのです。大名たちだって物語に出てくるような素破（すっぱ）とか忍者とかいうことで、諸国の動き、諸大名の動きは収集していたのです。問題はそういう物をどうやって活かすかということになるわけです。

現在、企業や組織の中で、こういうことを言う人がおります。「あの人に本当のことを言うと機嫌悪くするから本当のことは伏せておこう。良いことだけ上げれば良い。」平和な時代であれば、それで生き残れるのですが、このような時代でしたら、それで生き残らないとは言いませんが、それで上手くいくのかな。

あるマスコミ関係の方は、日本が右肩上がりの時は、経済界の代表にしても政治家にしても、インタビューにいくらでもOKでした、待ってましたとニコニコ笑って、ところが今のような時代になって、申し込むと皆逃げるのだと言っています。むしろ今の時のほうが、大事なのではないかとその人は言っています。やはり今の時代ってというのはそういう難しいというか大変だというのが解かっていたら、その中であなたならどうするのか、口で言うことは簡単なのですが、本当に難しいのです。

ですが、それをあなたが実行する、やれるかと問われた時に「エヘヘ」とにっこり笑って頭を掻いてしまうか、俺だったらこれをやってみる、だから今まで俺はこのことは口に出せなかった、自分でできる自信があるから言ったのだという所まで言い切れるかどうかということなのですね。非常にこれ難しいことなのです。

いくつということではなく、ある年齢に達すると、理屈では分かっているけれど身体が動かない、ということにもなり兼ねない。これは男女問わないことです。身体が動かないというのは、しかもそれを人の前で言えば、自分の弱み、弱点を見せたことになり尚更相手につけ入れられる、尚更警戒しなきゃならない大変なことで、難しいことです。

そういう中で、この前田家は生き抜いていったわけなのです。前田家が生き抜くまでの間、戦国大名は大変な勢いで、改易になる前でも淘汰されているのです。その淘汰されている例として出したのが、その左側の真中辺に書いてある大名の消長です。

大名という言葉そのものですが、日本で歴史上から言うと大化の改新の時に全部土地も人民も国家のものだという、いわゆる公地公民制（中国唐に倣った制度）ができました。段々人口が増えてきて、土地（公地）が足りなくなり、足りなくなるとすると、人間が増えて、人口が増えて足りなくなると来たら、これをなんとか増やさなきゃならない。ということは当然、ここで新しく

開墾しなければなりません。開墾する間は収穫物はないですから、政府の税金・税収はない。税収がないから、その間免租といって税金出さない、当時は収穫物出さない。しかもそこで開墾するということになれば手間暇とか色々な人間の手がかかるから、個人で開墾するということは大変です。そうするとそういう組織力とか、ある程度金があるとか、政府に顔が利くとか、そういうものがが必要です。となると、そういうことがやれるのは大きな神社・仏閣で、そこが地方で開墾した所にその地名や人名を付け、自分の主のところの名前を付けるのが名主の始まりで、しかもそれがたくさんになれば、大名主となり、これが平安時代、地主です。

では、その権利を持っているお寺とか有力な貴族、政治家、藤原貴族たち、こういう人たち、いわゆる有力な貴族やあるいはこういう人たちはどうしたか、都にいて地方のことはこういう開拓者に任せただけです。任せただけからそこで段々勢力が大きくなってきて、鎌倉時代になって頼朝が平家を滅ぼした時に、平家の領地に新しい頼朝の家来を鎌倉から送ったのです。

その頼朝から送った家来が守護です。この守護が段々勢力を伸ばして大きな力になったのが室町時代。これが守護大名。この守護大名の中から交代で足利幕府のトップに躍り出たのが、細川家、山名家で、これが応仁の乱を起こします。この守護大名たちが、自分達の家来にやられてしまういわゆる下克上、下のものが上のものを倒す、そこで出てきたのが今までの家柄とかなんとかを別にして本当の実力者だけが出てきた。それが戦国大名です。

ところが、この戦国大名も淘汰されてしまう、淘汰されてしまって関が原の合戦の後、徳川幕府の下についた大名が近世大名です。この、我々が普段大名の様な生活とかお大名だねと言う場合、この近世大名を指す場合が多いですね。

やがて明治維新になって、大名が全部無くなります。その時にどうなったかこの大名たちは。加賀の前田家のような大名の中のトップ、これは明治になってから、明治政府に協力するという形をとらされ、いわゆる華族に列せられました。これは英国の貴族制を真似たと言われていています。いわゆる爵位を与えられた。公爵、そうろう候爵、それから伯爵、公候伯子男この五つの爵位を与えられた。ただ単に爵位を与えられただけでは、今までの殿様は食べていけないのです。領地は皆無くなり、家来無くなって、この人達、上の公爵と侯爵は自動的に貴族院議員（今の参議院議員）になりました。伯爵以下はどうしたかと言うと、これはお互いに互選で当選したのが議員になったのです。

加賀の前田家の子孫は公爵、それから島津家も公爵、そういう有力な大名は公爵で、それ以外は伯爵以下です。これも太平洋戦争に負けたら、爵位も皆無くなってしまいます。大名の子孫は何をやっているのか。私が小学生の時に住んでいた所の町会長は元大名で、貴族院事務局に勤めておられました。

町会長で貴族院事務局に勤めていた方がどんな家に住んでいたかと言うと、台所と二間の平屋でした。これが時代の変化です。時代の変化というのは色々な所で、そう言う例がたくさんあるのです。



この戦国大名の中でのし上がったのが加賀の前田家であり、豊臣家も、徳川家もそれに近いです。前田家が生き残りを賭けるということで、良く言われるように前田利家はナンバーツーだと言うのですけれど、最初から希望してナンバーツーになったわけではないのです。自然発生的というか自分では一生懸命やったのだけれど、そう言う宿命というか、そういう方向に行ってしまったのです。ここでNHKの物語ではありませんが、内助の功というか奥様がしっかりしていたということが物語の中では出て参ります。実際の前田家の資料の中では芳春院、(没後のまつさん)の記録があまりないのだそうです。

しかし、記録があまりないのでは物語になりませんし、皆NHK見てくれませんかから(笑)、物語の中では色々創作、フィクションを付けているわけです、生き残りを賭けて。

先程の一覧表の中ですが、徳川が天下を取った時の悲劇として最も物語の中に出てくるのは豊臣家です。

私は自分の恩師が死んで草場の陰から見て、あいつこんなことを書いてと言われることを覚悟して、恩師がいらないから言うのですが、歴史の中で“もし”という仮説はいけないと言われていています。歴史というのは済んだことを皆事実として、それを分析するのですから、事実として分析する時に仮説を立てて、あの時こうだったらと言うのでは物語、小説です。それを、ここで敢えてやったのです、仮説として。

その仮説で、豊臣家のねねさん(北の政所)の存在がどうだったのか。この人は先程の物語の通り、秀吉にも協力し、秀吉がまだ秀吉と言われる前、猿、猿と言われ、藤吉郎と言われた時代から、ねねさんは秀吉を立てて、そして猿にはもったいない女房だと言われる位この人は良く協力もし、内助の功があった。そして北の政所というのは、亭主は南の方、南面を向いていることに対して、女房は北方だということで、自分の内の中の裏向きのこと、裏方のマネージャーという意味で貴族、公家の方が自分の女房に付けた呼び名です。しかもこの政所というのは奥向きのこと、食事から衣類あるいは、裏方の人事権、時には部屋割り全部やった相当の権力者です。

だから、そのねねさんが秀吉が死んだ後、当時の慣例に従って、大阪城を出て京都に移り、高台院になりましたが、高台院になったけれども、いわゆる尾張以来の色々な人間関係の繋がりで大阪に来たり、江戸に行ったりする大名の中には大勢京都の高台院(今の東山)に寄っているのです。それが歴史家によれば、関ヶ原の合戦の時に、この北の政所、ねねさんがそこに寄った武将たちに、徳川に、家康に付けとすることをそれとなく話したという説もあります。

さてそこで私の考えです、承久の乱の時の北条政子は鎌倉が危ない時に、これから鎌倉から京都に幕府軍が攻め入る時に、「今ここにあるのは、うちの夫頼朝のお陰ですよ。ここであなた方頑張ってくださいよ。」ということを出したのですが、もしそのことを北の政所が秀吉に関係深い大名たちに、「秀吉はいないけれど、豊臣家のために皆頑張ってくださいよ」と、ねねさんが言っていたなら、

天下の情勢は変わったのではないかという考え方、見方を小説家だったらするのではないかと言うことで仮説を書いてみました。

徳川家、家康、と悪者にされていますけれど、徳川家が大阪城に対して、別の所に移るか、あるいは茶々（淀君）を江戸に来させるかどっちかにしたらどうだと言うことを徳川方から打診したのですが両方とも豊臣家は拒否しました。徳川方から見れば攻撃をする口実ができ、しかも他の諸大名の大部分も皆徳川方に靡いているのですよ。

小田原城の中で秀吉が小田原征伐をした時、天下統一の論功行賞の中で家康に対して、三河の他5カ国を全部提供させて、その代わりに関八洲関東地方8カ国これを内府に与えたことが徳川幕府の関東地方に根付いた根拠です。その時に徳川の家来は大部分が反対したそうです。「三河以来の所を何で出なくてはならないのだ、しかも不便な江戸に行くとは。」その時に家康は「まあ待て、江戸は広い土地で自由にできる。俺に付いてこい」と言って説得したと言われています。しかも家康がいたこの三河含めての5カ国、そこに織田信長の長男は本能寺の変で戦死、三男信孝は後に切腹させられた、次男信勝だけは生きていて、これを秀吉は内府の後に据えろと言ったら、信勝は「私は先祖伝来の織田家の領地である尾張と伊勢の2カ国だけで良いから、ここに置いてください。」と言ったのです。秀吉は「何を生意気なことを言うか。俺は天下人である。そういうことを言うならば、おまえの土地は全部召し上げる。」と言って没収して、下野宇都宮に預けの身となったのです。織田信勝にはそういう前例がある。

今度は徳川が天下を取ったならば、豊臣に対して大阪城を出るとか、人質よこせと言っても、徳川方から見れば天下取ったら当たり前で「俺の言うことが聞けないのか。」と言う態度になります。それを豊臣方には読めなかったのか。あるいは、仮にそういうことになっても、やはり豊臣家は滅ぼされる運命にあったのか。少なくとも攻撃される口実を与えたことは確かです。そういう部分があります。

さて、最後に、前田家の方に移りますと、利家は歴史上の物語からは、若い時から信長の近臣として一生懸命働いていたが、何かに付けて秀吉に差を付けられる。秀吉も一生懸命やっている、利家も一生懸命やっている。しかしどこか少し違うのだということで差を付けられる、まつさんとねねさんは同じ長屋でもってお互いに仲が良いし、情報交換もしているし、合戦があり留守になれば、一緒に御茶漬を食べたという仲でした。まつさんにしてみれば、うちの亭主は一生懸命やりながら、何よちっとも殿様に認められない、そういう話があったということは物語の中には出ているのです。だから利家がナンバーツーにさせられたということは、ある面では先程私が伏線で話したんですけど、世の中には一生懸命やりながら、どうも？と言われる人がむしろ多いような気がするんです。それを女房というか回りの人が支えたと言いますか。

利家は、秀吉から、亡くなる前臨終の時に「秀頼を何としても頼むよ。」ということ言われた。利家はそれを「ああ、分かったOKだ」と言ったのです。



が、秀吉が慶長3年に死んで、その翌年利家もさっと死んでしまうのです。そうすると家康に対するライバルというのはちょっと見渡したところいなくなってしまう。これが家康の一つの幸運だとも言えるのですが。さてその後を嗣いだ利長、この利長は徳川家の方が目を付けて、何とか味方にしたいので、味方にするために試すわけです。

前田家は豊臣に付いて徳川に謀反を企むというデマを飛ばした。ここで、利長はその気は全然ないということで、その証拠に自分の母親を人質に出すわけです。そしてまっは江戸に行くのです。この時代、今と違いますから、自分の母親を、果たして戻ってくるか戻ってこないか分からない人質に出すというのは大変なことだったのです。それを、あっさりではないのでしょうけれど、ともかく前田家はやっている。しかもこのまつさんはすぐに江戸から戻っていないのです。一説には利長が死んだ後になってから、ようやくまっは許されて金沢に帰れることになりました。その時にまつさんは京都に行きたいと言って、京都見物と言うことにして京都へ行って、自分のかつての親友であった、ねねさんと会っているのです。

もちろん、ねねさんは秀吉が亡くなった後です。しかし昔の友達ということで旧交を温めたということまでは分かっているのですが、何を話したかの記録は一切ないのです。ただ高台院で会ったよということの記録はあるので、そこでまた、小説家なり劇作家が出てきて色々な物語をそこで仕立てるわけです。ただ徳川家としては利長が活着しているうちはやはり警戒を解かなかったのです。

その利長の後を嗣いだ三代目の利春、これは前田家の、今流に言えば正妻、1号さんの子供ではないのですね。2号さんの子供です。しかし、これがなかなか力があるということで、この利春に三代目を嗣がせるわけですが、その三代目を嗣がせる対象の時、歳若くて利長がまだ実力のあった時で、これの嫁さんを江戸から迎えて、二代将軍秀忠の、これは記録に出ている利春9歳、秀忠の娘たまさん3歳、明らかにこれ政略結婚でしょ。9歳や3歳で何ができますか。お互い同志ままごと遊びです。ところが政略結婚ということで前田家はどうしたか、秀忠のお嬢さんを迎えるということで、この子のために新居を建てているんです。その家来200人とも300人とも色々なこと言われています。そのご家来衆のためにも全部新築しています。このご家来衆は、この人のお世話をしますということで江戸から来た。その人達皆大人ですよ。中には遊び仲間もいたみたいですが、その人たちが江戸に手紙を出すんです。前田家でどうしたとか、ということは前田家のやっていることは江戸表に全部筒抜けなんですよ。

この家来たち、ただ単に一緒になって、にっこり笑って良かったねと一緒に付いて行っているわけではないのです。それ以上のことがこの裏側にあるのです。

例えば歴史上で言うと家康の長男、信康は切腹させられた。これご存知ですよ。あの信康の奥さん誰です。織田信長の娘です。織田信長の娘で、信康の

色んなことを自分の女房あるいはその一緒についていたのが信長に手紙を送っている。それを信長が見て家康や家康の家来に対して、信康はこういうけしからんことをやっている、おまえらここにきて全部申し開きをしてみろ、と言って、家康もその家来を信長の所にやって申し開きをさせようとしたけど、その家来達は何も言えなかった。黙ってることはこれ認めるんだな、で信康切腹。だからそういう危機が前田家にはあるんです。

将軍家の娘を嫁にすると、前田家はこれだけじゃないんです。徳川家や徳川の政権と何かに付けて縁を付けようということで、先程の本多正純は改易になっていますね。

跡取りになったのは改易になっている、その弟は前田家の家老として召抱えています。だから本郷の東京大学の所に前田家と徳川家と一緒にあった印として赤門（現在重要文化財に指定）があると言うんですけど、前田家はこの11代将軍の家斉の時の赤門より以前に徳川家とは緊密な姻戚関係とかそういう政治的結びつきを前田家しているんです。

それだけじゃないんですね。色々な政治向きのことについては前田家は口を出さないということを一つの態度で示す、それは文化政策ですね。これだけたくさんのお大名が潰された。その家来たちは皆失業でしょ。それが浪人ですよ。その浪人の中には禄がなく、収入がないのだから生きていけない。生活のためにこの人達何をしたか、それこそ色んなことをやっているのです。商人になったり、あるいはちょっと字の書ける人は学習塾、寺子屋の先生になったり、あるいはお坊さんだったり、あるいは元の自分の領地に行って百姓になったり、色んなことをやっている、中には筆でもって生きるということで、例えば近松門左衛門なんていうのは有名な劇作家です。あれは元武士です。前田家はそういう浪人の中でめぼしいのを召し抱えた。その中で、召し抱えた木下順庵、その弟子が新井白石（後の幕府政治顧問）、そういう文化政策をやっています。

商業政策ではちょうど江戸の中期元禄のころ、京都の一流の宮崎友禅の弟子を抱え、加賀友禅という友禅ものの反物を作ったのです。それで京都から茶人を呼んだということで、加賀でも茶の湯を盛にしたということの背景には前田家の娘が天皇家に嫁いでますよね。あの桂離宮の資金というのは全部前田家です。

しかもあの桂離宮というのはドイツの建築家ブルーノ・タウトが世界に紹介して有名になったのですけれども、幕府に対する、京都所司代に対する手前もあるから表向きは非常に質素に見せているんですね。ところが、中の建築のデザインなんていうとまさに当時の一流のものです。だから表向きは松だとか杉だとかいわゆる安物の材料を使っているんですけど、それを非常に高く見せている点が桂離宮の特色と言われています。全部前田家がスポンサーです。そういうことをやっています。

私達はこういうことをやっていて、幕府の政治のことに一切口を出さない、しかし身内は大事にします。西軍の副大将になった宇喜多秀家の女房、これ前

田利家の娘豪姫。宇喜多秀家は本来なら西軍の副大将なのだから、打ち首になるべきところを助けられているのですけれども、八丈島に島流しになっているのです。

普通、この当時島流しというのは、一つの島の中にいてそこで何をやってもいいと、要するにそこで自活しろと言うことです。元殿様がですよ、自活しろと、できないとさっさと死んでしまう。ところが宇喜多秀家は81歳まで生きています。

前田家が豪姫の実家ですから、毎年、家来と主人用に、その食料とか日用品は必ず送っているのです。身内は大事にするとすれば家臣は団結するじゃないですか。最後まで面倒見てくれる。だから前田家が生き残りを賭けるといのは色んなことをやっている。これだけだとある面言えば偶然性もあったでしょうね。だから先程の話の通り、豊臣家が、淀君がもし江戸に人質に行ったりあるいは国換えに応じたりしたら、徳川ではどういう態度に出たか、これは仮定の仮定、仮説の仮説ですからね。どうなるかわかりません

もう一つここで、石田三成ってすごく評判いい人ですよ。だけどあの人20万石なんですよ。秀吉から非常に期待をされた近江佐和山の領地で20万いかなかったのです。それが徳川家（250万）に対抗し、10分の1です。だから堺屋太一氏（作家、元経済官僚）が石田三成のことを、諸大名を集め、関ヶ原の合戦に至るまでを「大いなる企て」で書いています。だけれども現代まで引っ張っていきますが、私が現在研究している現代史では、どう考えても日本はアメリカに勝ち目はなかった。

零戦や戦艦大和を作ったと言っても海軍が勝ったのは太平洋戦争で三つしかないのです。（ハワイ、マレー沖、インド洋）それ以外は海軍は勝っていない。零戦は優秀だったとか、大和は沈まないとか、しかも戦争を始める前の陸軍大臣東条英機という人は総力戦研究所という所の研究で、日米戦をしたら日本はとて勝ち目がないということまで自分たちで言っていたのです。それでも戦争をした。

石田三成、勝ち目がないのに戦争をした、自分は引き回しの上打ち首になった。今度の戦争の場合もごく一部の人、実際に戦争を計画・立案した作戦参謀とかのエリートの人達は、私の知っている範囲では責任を取っていません。それでも日米戦争は避けられなかったのか？日本に自活・自立の方法はなかったのか？石田三成の場合は秀吉が死んで2年後に関ヶ原の合戦をして、大いなる企てということで諸大名を集めたけれど、やっぱり勝てなかった。仲間の中から裏切り者まで出た。そうすると結果においては、豊臣家を滅ぼしてしまったという点から見ると、この石田三成と対峙することは現在の戦争ということは先程の色んな物語や事実から見ればあまりにもかけ離れているし、また、資料が色々と複雑怪奇ですから一概には言えませんが、現象として見た場合、これから21世紀に我々が生きていく上で戦争とか対立というものを如何にして避けていくか、そのためにたくさん日本が金を出せとか、あるいは国家が赤字であるのに一生懸命経済援助しろと言うことではないと思うのです。これからの生

き方というのを考えて実行しなければいけないと思うのです。